

これがわたしの旦那さま 5

目次

おまけ	Wedding After	299
ハッピー	エンドに向けて	162
迫りくる刻		6

登場人物 紹介

ケヴィン ▲

シグルドの従兄で、第一の側近。
シュエラの後見人を務める。

ヘリオット ▲

シグルドの近衛時代の仲間
第二の側近。お調子者だが実は策士。

レナード ▲

大国グラデンヴィッツ帝国皇帝。
シグルドに難題をつきつけるが……

▲カチュア

マントノン夫人 ▲

セシール ▲

フィーナ ▲

シュエラ付きの女官・侍女たち

シグルド ▲

23歳。ラウシュリッツ王国国王。
大国の侵攻を退けるものの、
その直後に同国からシュエラを
要求され、思い悩む。

シュエラ ▲

18歳。貧乏伯爵家の長女だったが、
国王の愛妾となる。愛するシグルドに
王妃として望まれているが……

迫りくる刻^{とき}

「シュエラ——!!」

シグルドは声の限りに愛しい娘の名を呼びながら、二人の近衛隊士^{このえたいし}に拘束された手を解^{ほど}こうと足掻^{あが}く。

出立^{しゅつだつ}したばかりの今なら、まだ間に合う——!

ケヴィンを止めなくては。王城の連中がこのことを知れば、きっと喜んでシュエラを帝国に差し出そうとする。彼らは自分たちが推^おす娘を王妃にできなくとも、シュエラが王妃となることを阻^{はば}めればいいのだ。彼らは、シュエラと繋がるペレス公爵派の貴族たちが自分たちの地位を脅かすことを恐れているのだから。シュエラがいなくなれば、さぞほっとするだろう。一人の娘が国のため、自らを犠牲にしたことに感謝^{かんしゃ}すらしないで。

そうなるのとわかっていながら、シュエラを行かせてなるものか……っ!

「離せ! 行かせてくれ!」

シグルドがあまりに暴れるので、腕を掴む近衛隊士の手が滑る。その隙を逃さず、シグルドは拘束から逃れ、再度扉に向かった。

が、先ほどシグルドに殴られ倒れていたヘリオットが、すかさず立ち上がって前に回り込む。それを押しつけようとした瞬間、シグルドはみぞおちに強い衝撃を覚えた。

シグルドは呆然としながら、そこにこぶしを食い込ませるヘリオットにしがみつき、ずるずるとその場に崩れ落ちていく。

薄れゆく意識の中、別れ際にシュエラが見せた笑顔が一瞬浮かび、そして消えた。

一方、数日前に実家の街の近くでシグルドと別れたシュエラは——

1 シュエラ帰城

少数の護衛を引き連れたシグルドの姿が遠ざかっていく。彼らは馬に乗って街道沿いに進み、やがていくつも連なる丘陵^{やまね}の陰に隠れて見えなくなった。

——どうかご無事で。

切々たる思いで祈り、見送り続けるシュエラの後ろで、彼女を王城に送り届ける役目に就いた男

たちは早速相談を始める。

「それじゃあ僕が隣町までひとつ走りてきますんで、アノンさんはシュエラ様の護衛をよろしくお願いします」

「ロアル。おまえは残って、他の奴を行かせたほうがいい」

「何ですか？」

「この中でおまえが一番、女性に対して無害そうに見えるからだ」

どっと笑い声が起り、シュエラは驚いて振り返る。

「それって、僕が一番男っぽく見えないってことですかあ？」

見るからにいいところのお坊ちゃんであるロアルが情けない口調で言うと、護衛の男性たちの間に再び笑い声が響いた。

「まあな。それに馬車が到着するまでシュエラ様のお世話をしなきゃならん」

シグルドを護衛してハーネット伯爵領にやってきたアノンは、笑うことなく無遠慮に言う。その言葉を聞いて、ロアルとシュエラは同時に口を開いた。

「あ、そうか」

「いえ、気にしないで。何ならわたくしも一緒に街へ行くわ」

二人を見比べたアノンは、まずシュエラに声をかける。

「シュエラ様、たとえ陛下が見ておられなくとも、命令に背くことはできません」

「そうですね。先ほどのご様子からして、陛下はあとで絶対確認なさいますって。前にシュエラ

様が王都へいらつしやる道中でお世話させていただいた時は、こんなに若くて可愛らしい女性が、国のために人生を犠牲にするなんて”っておいたわしく思ってたんですけど、心配することなんて全然なかったですね。あんなに愛されてらして、男の僕でもうらやましく思ってたくらいです」

調子よく話すロアルに、アノンがすかさず注意した。

「ロアル、おまえは男のくせに口数が多すぎる」

「性分なんだから仕方ないじゃないですか——って、あ、すみません。ご不快でしたか？ シュエラ様」

拗ねたようにアノンに言い返したロアルは、途中でシュエラの様子に気付き、申し訳なさそうに頭を下げる。

シュエラははっと物思いかから覚め、慌てて笑みを浮かべて取り繕った。

「不快だなんて、そんなことはないわ。わたくしは騒がしい邸で育ったから、おしゃべりを聞いているとむしろ落ち着くんです」

これは本当のこと。弟たちがいつも騒いでいたせいか、静かだと逆に落ち着かない。王城で暮らしていた時も、気軽におしゃべりしてほしいと侍女のみんなにお願いしていたくらいだ。

「本当ですか？ 遠慮なさらず、嫌なことは嫌だとおっしゃってくださいよ？」

疑わしげにシュエラの表情を窺うロアルの脇で、護衛の男性たちは相談を再開する。

「アノンさん、俺がひとつ走りして、シュエラ様をお乗せする馬車を呼んできます。いつでも出発できるように待機させよとのケヴィン様のご指示でしたので、すぐこちらに向かえると思います」

「じゃあ俺は、宿の手配をしに行つてきます。大人数での移動なので、なるべく早く宿の確保をしない」と

「あ、宿の手配なら僕が」

「ロアル、おまえはいいから、シュエラ様のお世話をしろ。いつまで街道の真ん中に立っただけだつてもいい？」

「そうでした！ すみません、シュエラ様。ええつと……あ、あの木陰がよさそうですね。僕の荷物に敷物が入つてるので、出してきます！」

別に立っただけでもよかったのだけれど、下手に言い出せばロアルを困らせることになりそうだし、そう思い、シュエラは先ほどロアルが示した木のほうへ歩いていった。

その途中、シュエラはさっきのロアルの言葉を思い出す。

——あんなに愛されてらして……

他の人の目にも、やっぱりそう映るのね……

実家の街の人たちもそうだった。彼らはシュエラたちを祝福し、歓声を上げて見送つてくれた。ついさっきの出来事ということもあって、その声は今もまだ耳に残っている。

シュエラもまた、シグルドの手で馬上に引き上げられた時、愛されているのかと思つた。馬の背の上で力強い腕に守られるように腰を抱かれた時や、人前だというのに額に口づけられた時も。

それに、シュエラが動揺して逃げてしまったあの時。

シグルドのあの行為も愛してくれているのならば説明が付くようにも思う。

——待てない。

シグルドの掠れ、切羽詰まった声が、不意に耳元によみがえる。

抱きしめられ、深く口づけられ、シグルドの確かな重みを全身に感じた。はだけられた胸元に、シグルドは顔を寄せて——

郎を出る少し前にあつた出来事を思い出し、シュエラは頬を赤らめる。

しかし別の事実がすぐにその考えをかき消した。

わたしは陛下に「好き」と言ってもらつたことがない——

それを思うと心が沈む。

国王であるシグルドから愛の言葉を欲しがらなくて、身の程知らずだとは思ふ。

それ以前に、その場の雰囲気やみんなの言葉だけで、愛されていると思ひ込んではいけな。もしあとになってそれが勘違いとわかつた時の失望は、きつと自分を打ちのめす。打ちのめされた後、立ち直れる自信はシュエラにはない。

何故ちゃんと尋ねなかつたの？ 陛下がわたしを王妃に望まれた理由を……

今から追いかけて尋ねるわけにもいかない。そんなことをすれば旅の供をしてくれるみんなに迷惑をかけるし、そもそも一人で馬に乗れないシュエラを連れてでは、国境に急ぐシグルドたちに追いつけない。

お戻りになるのを待つしかないわ……

それがいつになるのかわからないから、シユエラは待ち切れずいろいろと想像してしまう。

迎えの馬車は、さほど待たずに到着した。

シユエラが立ち上がった馬車に近付くと、少し白いものの混じったブラウンの髪を持つ中年の女性が中から出てきて、シユエラのほうへ早足で歩いてきた。

「王城に戻って王妃様になられるそうですね。おめでとございます！」

王都から実家に戻る時に付き添ってくれた女性だ。二週間にわたる旅の間、彼女は始終むっつりしてシユエラとほとんどしゃべろうとしなかった。だからこんな風笑顔でお祝いの言葉を言われると、失礼とは思いつつも戸惑ってしまう。

「あ、ありがとうございます」

ついでもって返事をする、女性は心配そうに眉をひそめた。

「あまり嬉しそうでいらつしやいませんか？ ……もしかして、まだお加減が悪いとか？」

「え……？」

「あ、申し訳ありません。勝手にべらべらしゃべったりして。お加減が悪いのでしたら、おしゃべりを聞くのも煩わしいですよね」

彼女が無愛想だった理由によく気付いたシユエラは、慌てて言い訳をする。

「ち、違うの。急に王妃になるよう言われて、わたくしなどで務まるのかどうか心配で。……ごめ

んなさい。こちらに到着するまでの道中も、心配かけ通しだったのね」

謝ると、女性は少し笑顔を見せて首を横に振った。

「そんな、気になさらないでください。旅の間、シユエラ様が過ごしやすいように取り計らうのが、わたくしの仕事なのですから。——わたくしごときが申し上げても気が休まらないかもしれませんが、使用人にも優しい言葉をかけてくださるシユエラ様は、きっと民を思いやる立派な王妃様になられますわ」

「……ありがとうございます」

本当に立派な王妃になれるのかと不安ではあったけれど、彼女の気遣いを無駄にはいけないと思い、シユエラは微笑んで礼を言った。

王都から実家への道中、一行はシユエラの体調を気遣って、ゆっくり時間をかけて進んだ。しかしすっかり回復した今はそのような気遣いも必要ないため、行きよりずっと旅程がはかどった。付き添いの女性はロアルか誰かに聞いてきたのか、前の旅とは打って変わって頻繁に話しかけてくる。シユエラも今回は、彼女と話すことで気を紛らわせていた。

けれど宿屋に入って一人ベッドに潜り込むと、陛下はどうしてわたしを王妃に望んでくださるの？ という疑問が脳裏をめぐって、なかなか寝つけない。

シグルドが望んでくれるのなら、自分はまだ立派な王妃になれるよう努力すればいいだけのことなのに、どうしても思い悩まずにはいられない。

毎夜悶々と考えているうちに、ふと、かつての王妃、エミリアが別れ際に言った言葉を思い出した。

——わたくしの次はあなたしかいない。

次の王妃はシュエラだとほめかした言葉。

もしかしてエミリア様は、陛下とそう約束なさって王城を去られたの……？

だとしたら、エミリアのあの言葉が確信に満ちていたのもうなずける。エミリアとの約束を、シングルが破るとは思えない。

どうしてもその推測が正しいように思えて、シュエラは落胆を覚えずにはいられない。

やっぱり、わたしのことを好きになってくださったからではないのかわ……

王妃——正式な妻にと望まれ、これからも好きな人の側にいられる。それだけで満足すべきなのに、シュエラの心はシングルドの愛情を求めて泣く。

望みが叶ってもなお満足しない欲深い自分。シュエラは自己嫌悪に苛まれながら、実家の所領を出て十日目の午後、無事王城に到着した。

2 より思わしくない日々

西門から入城したシュエラを出迎えてくれたのは、懐かしい顔ぶれだった。

「お帰りなさいませ、シュエラ様」

女官のマントノンは相変わらず無表情での挨拶だったが、背後に並んだ侍女たちは口ぐちに返ってきたシュエラを歓迎する。

「お帰りなさいませ、シュエラ様！ さぞお疲れでしょう」

笑顔で労りの言葉をかけてくれるカレンに続いて、マチルダがシュエラを案内しようと手を差し伸べる。

「お風呂をご用意してあります。旅の汚れを落とされて、ゆっくり休んでくださいませ」

フィーナとセシルも「おかえりなさいませ」と挨拶をすると、早速馬車に駆け寄って、中にいた付き添いの女性からシュエラの鞆を受け取った。

「旅の間、いろいろとありがとうございます」

馬車から降りた女性に声をかけると、女性は深々とお辞儀をする。

「こちらこそ、シュエラ様のお世話をさせていただき、大変楽しゅうございました。ありがとうございます」

お辞儀をし続ける女性にもう一度「ありがとうございます」とつぶやいてから、シュエラはマントノンや侍女たちに付き添われ、北館に向かって歩き始めた。

お風呂に入る手伝いは、カレンとマチルダがしてくれた。

「休暇中、みんなはよく休めたかしら？」

「はい。一カ月近くお休みをいただきましたもの。家族や婚約者ともゆっくり過ごせて、とても有意義な休暇になりました。ありがとうございます」

カレンはシュエラの髪を丁寧に洗いながら朗らかに答える。

「よかったわ。呼び戻すのが早すぎなかったかと、心配だったの」

「シュエラ様はずっと旅をなさっていたから大変だったでしょう。でも、わたくしたちはずっと王都にいたんですよ？ 一カ月の休暇なんて長すぎるくらいです」

シュエラの心配ぶりが面白かったのか、体を洗ってくれているマチルダが笑い声を上げた。

隣の部屋から、人々がばたばたと行き来する音が聞こえてくる。別の馬車に積まれていたシュエラの荷物が運び込まれ、フィーナとセシルが片付けているのだろう。

お風呂から出てガウンを着せかけてもらう頃になると、いつの間にか隣の部屋も静かになっていく。ノックのあと、セシルが遠慮がちに顔を覗かせる。

「隣のお部屋の片付けは済みました。シュエラ様のお着替えの用意もできていますが、お手伝いすることはありますか？」

「それならシュエラ様をお部屋へお連れして、髪を乾かして差し上げて。わたしたちはこの片付けを簡単に済ませてから行くわ」

「わかりました」

マチルダに代わってセシルがシュエラの濡れた髪を捧げ持ち、フィーナの先導で寝室の鏡台の前に座る。細かいウエーブのかかったシュエラの栗色の髪を柔らかな布で挟んで叩きながら、フィー

ナが言った。

「一週間くらい前なんですけど、カチュアから手紙が届いたんです。旅は順調だそうですよ」

侍女の一人であるカチュアは今、元王妃エミリアを隣国に送り届ける旅の最中だ。そして国境を越えたところで、エミリアの恋人である元王太子ウィルフレッドと落ち合うことになっている。

「よかったわ。他には？ 何か書いてあったのかしら？」

「いろいろ大変そうです。エミリア様はお料理や積み荷の上げ下ろしとかを手伝ってくださいそうですけど、どうしても話し方や仕草が上品すぎるのだそうです。それでとても平民には見えず目立ってしまうんですって。いつそのこと元貴族であると明かしたらどうかって、そんな話になっているそうです」

「でも、市井しせいでお暮らしになるのだから、やはり隠した方がいいのではないかしら？ そうしなればウィル様も注目されてしまうわ。エミリア様はともかく、ウィル様は……」

亡くなったことになっているとは言いがたく、シュエラは口ごもった。

シグルドの異母兄であり、本当なら国王になっていたはずのウィルフレッドが生きていると知れたら、どんな輩やからが彼を利用しようとするかわからない。そうなった場合、エミリアの身にも危険が及ぶ。王城のような守りのない場所では二人に身を守る術すべはない。それに、ウィルフレッドの生存を隠して国を治めていたシグルドの立場も危うくなる。シグルドは王位おうい簒奪さんだつの罪に問われ、下手をすれば最悪の刑に処されるかもしれない。

「そのことはカチュアも悩んでいると手紙に書いてありました。とりあえずウィル様たちと合流し

て、話し合ってからまた考えるそうです」

「そう……」

心配ではあるけれど、ここで一人で悩んでいても自分にできることは何もない。それに、エミリアならばきつと大丈夫だろう。何しろあの狡猾な前ラダム公爵を罠に嵌めるほどに知恵を持った女性なのだから。

今はみんなの旅の無事を祈ろうと気持ちを落ち着かせていると、入浴の片付けを終えたカレンとマチルダが戻ってきた。

「あら……？　これは正装よね？　シュエラ様は長旅を終えられたばかりでお疲れなのに、今から何かあるの？」

マチルダが首をかしげながらベッドの上にあったドレスを手にすると、セシルが口ごもりながら言った。

「それが、先ほど連絡がありまして、クリフォード公爵とブレイス侯爵が至急シュエラ様にお会いしたいと……。お二人とも既にお待ちになっていらっしやいます」

正装用のドレスに身を包んだシュエラは、北館一階にある応接室へと急いだ。

マントノンを伴って部屋に入ると、クリフォード公爵とブレイス侯爵がソファから立ち上がりつつシュエラを迎える。

それぞれが改めてソファに座ると、クリフォード公爵が最初に口を開いた。

「お久しぶりでございます、シュエラ様。静養のためにご実家に帰られたとのことですが、お加減はもうよろしいですか？」

長旅を経て王城に到着したばかりの自分に面会を申し入れてきたということは、おそらく急を要する重大な話があるのだろう。穏やかな口調ではあるけれど、クリフォード公爵の表情が硬いことから、自分の読みが当たっていると確信したシュエラは緊張しつつ口を開いた。

「はい、おかげさまで。王都を出発する際にお邸に一泊させていただきました、ありがとうございます。きちんとお礼を申し上げるのが遅くなりました、申し訳ありません」

「邸にお泊めたのは、後見として当然のこと。普段は息子のケヴィンに後見の務めを任せきりなので、お役に立てて何よりです。ところで、先ほどケヴィンの従者のロアルがわたしのもとに来てきて、このようなことを言ったのです。——陛下が実家にお戻りになったシュエラ様を追いかけたいき、王妃にすると宣言なさったと。シュエラ様、それは本当のことでしょうか？」

やっぱりそのことについてなのね……

シュエラの緊張はさらに高まり、膝の上に置いた手に力が入る。

国王がお忍びで長期間城を空けるなど、あつてはならないことだ。シグルドが実家の街を訪れた本当の理由はわからない。けれど、シュエラと会い、「王妃になれ」と言ったとなると、それが目的であったと考える人は多いだろう。たつたそれだけのために国王が城を空けたと知れたら、シグルドを非難する人々が現れるに違いない。

ロアルが既に報告しているのなら、今さら隠しだてをしても仕方がない。でも、そうとわかつて

いても、シグルドに不利になることは言えない。

クリフォード公爵はふっと表情を和らげて、黙り込んだシュエラをなだめるように微笑んだ。

「シュエラ様、我々は状況をしっかりと把握して、適切に対応したいだけなのです。どうか正直にお答えくださいませんか？」

「それは、……はい、本当です」

それを聞いたクリフォード公爵は上を向き、ブレイス侯爵は下を向いて、それぞれ大きなため息をつく。

「シュエラ様、それであなたは陛下に命ぜられるままに王城へ帰ってきてしまったんですな？」

呆れ混じりのブレイス侯爵の言葉を聞いて、シュエラは身を縮こませながらうなずいた。

ブレイス侯爵はラダム公爵派の有力貴族で、代替わりしたばかりのラダム公爵に代わって派閥を取りまとめている人物だ。

彼はシュエラが実家に帰る直前、国とシグルドのためを思い、愛妾あいしやうの座から降りるようシュエラを説得した。侯爵はそれ以前にエミリアからシュエラの人柄について聞いていて、エミリアが誉めたたえるほどの人物なら最善の選択ができると信じたのだ。

王城に入る前にここにいる二人には相談するべきだったかもしれない。考えが至らず、彼を失望させてしまったことが辛い。

うつむいて唇を噛みしめるシュエラに気付いて、ブレイス侯爵は苦く微笑んだ。

「申し訳ない。あなたを責めるような言い方をしました。陛下のお言葉に従わざるを得なかつ

たことはわかっています」

「いいえ、わたくしもそう望んだのです。ですから責められても……」

当然です、と言いたかった。でも本当に責められるのは怖くて、シュエラは途中で言葉を呑み込んでしまう。ブレイス侯爵はシュエラをいたわるように続けた。

「あなたの立場を考えるならば、国王陛下はきちんとした手順を踏まれるべきでした。——と言われても、こちらに戻られたばかりのあなたには、何が起こっているのかよくわからないでしょう。ご存知のこともあるかもしれませんが、一通りお話しします」

ブレイス侯爵は表情を引き締めた。

「陛下は、病に伏して誰とも面会できなくなつたと偽り、王城を抜け出してあなたに会いに行きました。その二日後、我が国との国境に軍を進める者有りとの一報が入ったのです。それは隣国レシュテンウィッツを平定後、その地に留まっていたグラデンヴィッツ帝国の皇帝でした。ケヴィンとヘリオットは国王陛下は一刻も早く国境に到着するために内密に立出された。ただ言い置き、陛下の後を追っていきました。陛下が正式に城を出るとなると様々な準備が必要になり、またそれなりの軍を率いる場合は移動にも時間がかかります。陛下の身の安全を考えると、二人の行動は決して誉められませんが、理にかなっているところもあります。ですが、次期王妃を早急に決めたがつている貴族たちが、それで納得するわけがありません。面会謝絶になるほどの方が、たった二日伏せただけで旅ができるまでに回復されるはずがない。彼らは国境からの報せしちが届く前から陛下のお姿が見えないことに不審の念を抱き、もしやあなたに会うためにこっそり王城を抜け出したので

はないかと疑っていました。そして今、彼らの疑惑を裏付けるようにあなたが戻られ、陛下をそのような愚行に駆り立てたあなたを非難する声が、日に日に高まっているのです」

わたしが非難されている——

シユエラは胸に痛みを覚えるのと同時に、愛妾あいしよつになった頃のことを思い出した。

シユエラが食事に盛られた薬のせいで倒れ、当時仕えていた侍女たちが冤罪えんざいにより王城を去らなければならなくなった時のことだ。知らないうちにシユエラへの非難が高まり、新たにつけられた侍女たちからも敵しい言葉を投げつけられた。

だがあの時、シユエラが長く王城に留まりさえしなければ、毒見の官司ぐわしは薬を盛ったりしなかったし、当然シグルドも侍女たちを罰したりしなかっただろう。

今回も、自分が静養のため実家に戻ったりしななければ、シグルドがシユエラに会うためにわざわざハーネット伯爵領にまで足を運んだと疑われずに済んだはずなのだ。

自分さえいなければ起こらなかった様々なことを思うと、安易に王城に戻ってきてしまった自分の浅はかさが、恥ちずかしくなる。

愚かな真似をした自分が責められるのは仕方がない。でも、仕えているマントノンや侍女のみんなは大丈夫だろうか。こんな自分を王妃にと望むシグルドの立場は？

シユエラは、膝の上で指先が白くなるほど強く手を握り合わせる。

ブレイス侯爵は険しい表情のまま話を続けた。

「一応あなたが戻られた理由は伏せておくよう、事情を知る者たちに傳達しておきました。ですが、

あなたが王城に戻ってきたことで、陛下があなたを王妃にするつもりであると推測するのは実にたやすいことだ。あなたの身の安全を図るためにも、陛下がお戻りになるまで北館からお出にならないでください」

ブレイス侯爵の言葉を継いで、クリフォード公爵もシユエラに告げる。

「面会の申し入れも、わたしとブレイス侯爵以外からは受けられないようにしてください。マントノン夫人や侍女たちも北館から出ないで済むように、この館の屋根裏にある使用人用仮眠室を彼女たちに使わせませす。外へ出なければならぬ用事は、近衛隊士こゑたいしらが引き受けます。——このような特別待遇は、あなたを王妃にしたくない貴族たちの反感をおおることになるでしょうが、以前あなたが暗殺されそうになったことを考えれば用心するに越したことはない。どうかご了承ください」

自分が帰ってきただけで、こんな大事おおごとになるとは思わなかった。いや、あの暗殺未遂や、シグルドたちのこれまでの警戒ぶりを考えれば、こういう状況に陥るのを察することができたはずだ。

王族ではないわたしが、近衛隊士の方々にここまで守られるなんて……

唇を噛んでうつむくシユエラに、クリフォード公爵は労りの言葉をかけた。

「先ほどブレイス侯爵も申しましたように、あなたに直接非があるというわけではないのです。ですが、個人的な思惑や見当違いな義憤ぎふんから、あなたを責めたり危害を加えようとする者がまた現れるでしょう。王妃になるかどうかは一度置いておくとして、今は近衛隊士の中でも特に信頼できる者たちに、あなたを守らせるしかありません。アノンという男もあなたの護衛にするようにと、口アルが陛下より承うけたまわってきました。それもわたしのほうで手配させていただきます」

クリフォード公爵もブレイス侯爵も劣^{いた}つてくれるけれど、本当に自分に直接非はないのだろうか？

でも、非があるが無かるうが、今は二人の言葉に従つておとなしくしているしかない。

「ありがとうございます……」

シュエラが小さく礼を言うのと、クリフォード公爵とブレイス侯爵は大きくうなずいて、同時に立ち上がった。シュエラも、二人を見送るために続けて腰を上げる。

ブレイス侯爵はマントノンが開いた扉の前で振り返つて、申し訳なきように微笑んだ。

「個人的な意見を申し上げるなら、あなたが王妃になることに反対などしたくはないのです。エミリア様がおっしゃつていたように、あなたは人柄も良いですし、王城を抜け出してまであなたを王妃にしたいと望む陛下の意向も汲んで差し上げたい。ですがわたしは、前ラダム公爵の失脚に伴い、瓦解^がしかけているラダム公爵派をまとめなければならぬ身。派閥の貴族たちの不満を抑える努力はいたします。が、派閥の者たちの信頼を裏切ることにはできないことをご理解ください」

ブレイス侯爵の立場を考えれば、自分を守るためにこうして話をしに来るだけでも、派閥の貴族たちの信頼を損ないかねないことは、シュエラにもわかつている。

シグルドに「王妃になれ」と言われたことで、貴族たちもシュエラが王妃の座につくことを認めてくれたと思つていた。が、やはり彼らの反発はまだまだ根強いのだ。

「そのお気持ちだけでも十分です。お気遣いありがとうございます」

シュエラはそう言つて何とか笑みを浮かべた。

シュエラが王城に戻ってきた翌日、突然聞こえてきた叫び声に朝方の静けさが突然破られた。驚いて耳をすましてみると、多くの男性の叫び声の中から、いくつかの言葉が聞き取れる。

——愛妾^{あひま}に会わせろ！

——何故戻ってきた!?

シュエラにとつては、耳が痛い言葉だった。こんなにも多くの人がシュエラの帰城を非難していると知つて、身がすくむような思いがする。

侍女たちもシュエラと同じように怯えていたが、マントノンだけは諦めとも取れるため息をついた。

「マントノン夫人……。あなたはこうなることを、予想していたの……?」

遠慮がちにシュエラが尋ねると、マントノンは氣遣わしげに眉をひそめた。

「昨日の夕方から夜にかけても、近衛隊士^{この}たちが非難や抗議に訪れた方々を追い返していたとの報告を受けています。追い返された方々もこのままでは埒^{さや}が明かないと考え、今度は声を掛け合つて集まられたでしょう。クリフォード公爵とブレイス侯爵が何とかしてくださることになつてますから、シュエラ様はあの方々の声にお心を乱されませぬよう、心穏やかにお過ごしください」

「マントノン夫人のおっしゃる通りですわ。どのみち、国王陛下がお戻りにならないことにはどうすることもできないんです。外で騒いでらっしゃる方々も——シュエラ様も」

セシールの少し突き放したような言葉が、思いがけずシュエラを安堵させた。

次期王妃の件については、シグルドが王城に戻ってくるまで状況が動くことはない。シグルドが「王妃にする」と宣言するまではシュエラは一介の愛妾あいしよでしかないが、シグルドの意向を汲くんで、クリフォード公爵とブレイス侯爵が擁護してくれている間は、王城から追い出されることもない。となれば、今のシュエラにできることは、別れ際シグルドと約束したように彼らの面会を断り、おとなしく待つだけなのだ。

するべきことが決まっているのなら、思い煩わづらったりしたところで何の意味もない。

「そうよね。今のわたくしには、ただ陛下をお待ちすることしかできないんだから、時間を有意義に使うことにするわ。マントノン夫人、エミリア様が出立なさったあと、わたくしの勉強を再開したいと言っていたけれど、今から始められるかしら？」

「え！ 勉強なさるのですか!？」

マチルダが驚いた声を上げると、カレンがそれを肘ひじで小突いてたしなめる。

「そうですね……今できる勉強と言いますと、貴族の方々の縁戚関係や派閥関係を覚えることくらいでしょうか？ 長らく王城から離れておりましたわたくしでは少々おぼつかないところがございますが、セシルでしたら長年王城に勤めていて今現在のことについて詳しいですから……」

マントノンが思案を始めると、シュエラは彼女のほうに意識を傾け、外の喧騒を心の中から締め出そうとした。

それから二日間、時間を見つけては貴族についての勉強会が行われた。

シュエラに面会を求める貴族たちがたまに騒いだりしていたが、あとは至って静かだった。クリフォード公爵とブレイス侯爵が彼らを抑えているおかげだろう。

ありがたく思うけれど、時間が経つにつれ、こんな風に甘えていいのだろうかと不安になってくる。

王妃になりたいのなら、彼らの目の前に出て行って納得してもらえるまで話すべきではないだろうか。こんな風に隠れているのは、国王から王妃にと望まれた者でありながら卑怯ではないだろうか。ここまで反対されているのに、本当に王妃になっていいのだろうか。

悩んでも仕方がないとわかっている。そもそも王妃に関する決定権はシグルドと議会にあって、シュエラにはないのだ。シュエラは決定されたことに、ただ従うしかない。

わかっているにしても、シュエラは外から怒鳴り声が聞こえる度に身をすくませ、考えても仕方のないことをあれこれと思索してしまふ。

そして三日目のこと。

朝食を終え、侍女たちが掃除を始めた頃、外でいつもとは違う騒ぎが起こった。貴族の怒鳴り声が、シュエラではない誰かに向けられているようだ。それらの声は遠くから近付いてきて、北館の前まで来たところでぴたっと止まる。

「何があったのかしら？」

「シュエラ様、気になられるようでしたら、様子を見に行つてまいりましょうか？」

「そこまでしてくれなくていいわ、カレン」
それから程なくして、シュエラの私室の扉がノックされた。

「どなたですか？」

マントノンが扉の向こうに声をかけると、元気な声が返ってきた。

「カチュアです！ たいいま戻りました！」

「え？ カチュア？」

一週間とちょっと前に届いたという手紙には、まだ帰ってくるような様子はなかったのに。

カレンが扉を開くと、外出用のドレスを着たカチュアが、椅子に座るシュエラのもとに慌てた様子で駆け寄った。

「ホントに戻っていらしたんですね！ よかったあ……。前にフィーナからもらった手紙に、シュエラ様が静養のために実家に帰ったって書いてあったから、エミリア様と一緒に心配してたんですよ！ エミリア様なんて、『わたくしのことはいいいから、戻って何があったか詳しく知らせ』って帰らせようとするし。あ、もちろん責任持って、エミリア様とウィル様が無事合流されたところまで見届けてきましたけどね！」

「それじゃあ、国境を越えたところまで見送ってくれたのね。それにしては戻ってくるのが早かったようだけど……」

驚いたシュエラの言葉に、カチュアは自慢げに胸を反らす。

「あたし乗馬ができるんで、帰りは馬に乗って飛ばしてきたんです！ あたしもシュエラ様のこと

が気になって仕方なかったんですよ。それで、何があったんですか？ 昨夜王都に着いて実家に泊まったんですけど、その時シュエラ様はとくに王城に戻られたって聞いて。そのくせ事情は誰も知らないんだもん」

興奮してしゃべり続けるカチュアを、マントノンはたしなめようとする。それをシュエラは、目配せて止めた。侍女としてはほめられたものではないけれど、賑やかなカチュアの話聞いてると、外の殺伐とした空気から気持ちが悪くほっとする。

マントノンは、物言いたげな視線を変えないものの、そんなシュエラの気持ちに気づいているのか、口を閉ざしてカチュアを見つめた。

マントノンが注意しないので、マチルダも調子づいて話し出す。

「それがもう、大変だったのよ！」

シュエラが王妃になると見込んだ貴族たちから贈り物が大量に送られてきた経緯や、その後の面談のこと、暗殺未遂があったこと、そしてシュエラが倒れてシグルドが実家での静養を勧めたこと……。マチルダは一気にまくしたてる。

そして外で起こっている騒ぎの理由を聞くと、カチュアは痲癩を起こしたように叫んだ。

「もー、いい加減認めればいいのに！ 陛下はシュエラ様しか王妃になさりたくないんだって！」

シュエラはそれを聞いて、前から疑問に感じていたことを思い出す。

みんなはどうして陛下自身がわたしを王妃にしたがつてるといふような言い方をするの……？

みんなが事あるごとにそう言うから、シュエラはシグルドに愛されているのではないかという希

望を捨て切れずにいる。

正直、希望を持ち続けるのは辛い。そんなことは一切考えず、王妃になるのは愛情とは関係なく、大事な役目を果たすためだと割り切れればいいのに。

「シュエラ様？」

いぶかしげに声をかけられ、シュエラははっと我に返る。顔を上げれば、カチュアが心配そうにこちらを見ていた。

「もしかしてお加減がまだ悪いんですか？ とんぼ返りだったそうですから、ご実家ではるくに休めてないでしょ？」

「え、ううん、体のほうは大丈夫よ。ちょっと考えごとをしてしまっただけ」

笑顔でごまかすと、カチュアはまた怒り出す。

「外の奴らのことなんて、ぜんっぜん気にすることないです！ 国のためだ何だと言ってますが、結局自分たちのためにああやって騒いでるんだから！ そんな奴らのことをシュエラ様が気に病むなんて、ムダでしかありません！ それより、明るく楽しく過ごして、元気に陛下のご帰還をお迎えしましょうよ！」

こぶしを握って力説するカチュアに、シュエラは思わず笑みをこぼした。

「そう、ね。そうよね」

「カチュア、いい加減に着替えてらっしゃい」

シュエラに止められて黙っていたマントノンも、これ以上放っておけなかったらしい。少しこめ

かみをひくつかせながら促すと、カチュアも素直に返事をする。

「はい。あ、マントノン夫人、ついでにエミリア様に送る手紙も書いてきていいですか？」

「あ、わたくしもエミリア様に手紙を書きたいのだけど、一緒に送ってもらえるかしら？」

「それじゃあシュエラ様も、あたしが戻ってくる前に書きあげておいていただけますか？ エミリア様、すっごくやきもきしてて、事情がわかったらすぐ知らせてほしいってしつこいくらいだったんですよ！」

「カチュア、言葉遣いが悪くなっていますよ。急いでいるなら、あなたも早く書いてらっしゃい。マチルダ、カチュアを部屋に案内してあげて」

カチュアがマチルダと連れ立って出ていくと、カレンが気を利かせて声をかけてくる。

「それでは、お手紙を書く道具をご用意いたしますね」

「ありがとうございます」

本当にカチュアの言う通りだ。くよくよしてたつて何が変わるわけでもないのだから、あまり悩まず、帰ってきたシグルドを一点の曇りもない笑顔で迎えたほうがいい。

陛下がお戻りになるまで、みんなに言われたように元気に過ごそう……

手紙を書く準備が整うのを待ちながら、シュエラは気持ちを新たにす。

二日後、その新たな思いを打ち砕く出来事があるとも知らず。

3 求められた覚悟

それは、シユエラが王城に戻った日から六日目のこと。
王城西門に、馬に乗ったままの一団が飛び込んできた。

「止まれ！ 止まらんか！」

開け放たれた門の脇で人の出入りをチェックしていた衛兵たちが、槍を構えて一団を阻む。
槍先を向けられ馬を急停止させたうちの一人が、城中に響き渡るような大声を發した。

「わたしはケヴィン・クリフォードだ！ 危急の報せあり！ 通してもらおう！」

国王の側近であり、クリフォード公爵の子息であるケヴィンを知らぬ者も、その彼をここに留め置くことができる者も、この王城内にはいない。みな慌てて槍先を天に向け、彼に對し敬礼する。

ケヴィンは勢いよく馬から降りると、近くにいた者に手綱を預け、脇目も振らず走り出した。

彼は今、王城に出仕する貴族にはふさわしからぬ質素な衣服を着て、髪を振り乱している。にもかかわらず、一部の貴族たちはそれが目に入らぬ様子でケヴィンに走り寄る。

「ケヴィン殿！ 陛下は、国王陛下はどちらにおられる!？」

「愛妾殿が王城に戻った理由を、ご説明いたさう！」

集まつてきた貴族たちに道を阻まれ、苛立ちを募らせたケヴィンは怒声を發した。

「今はそのような話をしている場合ではありません！ 道を開けてください！」

外から騒ぎが聞こえてきて、シユエラは反射的に身をすくませた。

「やあねえ。今度は一体何?」

騒ぎにすっかり慣れたカチュアは、好奇心が抑えられない様子で窓際に寄る。

そんなカチュアを、マントノンはぴしやりと叱った。

「カチュア、窓に近づかないように」

「近付かなきゃ見えないと思うんですけどお」

「カチュア」

独り言のようにぶつくさ言うカチュアに、マントノン夫人はもう一度呼びかける。

「はあい。申し訳ありません」

カチュアはふてくされながらも、きびすを返してシユエラの近くへ戻ってくる。

と、その時。

ひときわ大きい声が聞こえてきた。

「ね、ねえ。今のケヴィン様の声じゃなかった?」

落ち着かないように言うカチュアに、フィーナが呆れてため息をつく。

「カチュアったら、またそういうことを言つて。そんなに外が見たいの?」

カチュアはむきになって叫んだ。

「そうじゃなくて！ 本当にケヴィン様みたいな声が聞こえたんだってば！」

「わたくしにも聞こえたわ」

シユエラは真剣な表情をして耳をすます。

「やっぱりさっきの声はケヴィン様でしたよね！」

「しっ、ちよつと静かに」

シユエラは嬉しそうな声を上げるカチュアを制する。カチュアは慌てて両手で口をふさぎ、シユエラと同じように耳をすましました。

国境に赴いたはずのケヴィンが、前触れもなく突然王城に現れるなんて、きつと何かあったに違いない。耳をすましても状況は掴めず、気持ち^は逸ったシユエラは思わず立ち上がる。

「シユエラ様、わたくしが様子を見てまいります」

セシルが気を利かせて小走りに扉に向かった。

それとほぼ同時に廊下をばたばたと駆けてくる音がする。セシルが扉を開けると、その向こうにケヴィンが姿を現した。

「ケヴィン様……っ」

想像もつかなかったその恰好に、シユエラは口元を押さえて息を呑む。

先日シグルドが実家の所領を訪れた時のような平民服に、全身を覆うマント。いつもは整えられている髪も、今は乱れて額にひと筋かかっていた。顔色も悪く、目の下には大きな隈が出来ている。

こんなケヴィンは初めて見た。この姿を見ただけでも、よからぬことが起きたとわかり胸がかき乱される。

いてもたってもいられず、シユエラはケヴィンに駆け寄ろうとした。

「ケヴィン様、陛下に何か——!?」

「陛下はご無事です」

ケヴィンが部屋に入り大股で近寄ってきたので、シユエラはその場に立ち止まって長身の彼を見上げた。

「では一体何があったのです？」

不安そうなシユエラの表情を見て、ケヴィンはわずかに痛ましそうに眉をひそめた。それから床に膝をついて静かに頭を垂れる。

「シユエラ様、どうかわたしと共に国境へおいでください。——グラデンヴィッツ帝国皇帝が、シユエラ様の身柄を要求しています」

この場にいる誰もが、彼の言葉の意味をすぐには理解できなかった。

しばし時を置いた後、マントノンが動揺に震える声で尋ねる。

「それは、グラデンヴィッツ帝国の皇帝がシユエラ様を欲しいとおっしゃられ、それに国王陛下が応じられたということですか……?」



ケヴィンは立ち上がって、マントノンのほうを向いた。

「少し違います。我が国は先だって、かの国と小競り合い程度の交戦をしました。その後、和平会谈が行われ、会談は途中まで成功しているかを見えました。ところがグラデン皇帝は和平の証として、自身の孫娘を陛下の王妃として差し出す代わりに、シュエラ様を要求してきたのです」

「何で!? 今のところシュエラ様はただの愛妾^{あいしやう}だし、伯爵令嬢と帝国の皇女とじゃ釣り合わないじゃない! なのにどーして帝国の側からこんな不平等な取引を持ちかけてくるんです!」

カチュアはケヴィンの傍に寄り、混乱したように声を上ずらせながら質問を投げかける。

ケヴィンは背の低いカチュアを見下ろして答えた。

「はるか昔、国がまだ部族という小さな単位だった頃、族長の娘だけでなく妾^{めかけ}も和平の証として差し出されていた時代があった。グラデン皇帝はその時代のことを持ち出して、シュエラ様でも十分その価値があると主張してきたのだ」

ケヴィンはシュエラのほうに向き直って告げた。

「皇帝は我々が把握し切れない情報網を持つているらしく、国王陛下がどれだけシュエラ様のことを大事になさっているかを知っていました。他にどんな情報を手に入れているかわからないため、身代わりを立てることもままなりません。大変なご足労となりますが、シュエラ様には国境までおいでいただきたい……」

「ケヴィン様! それってシュエラ様にご足労 いただくだけじゃすまないですよね!? 孫娘を陛下の王妃に差し出す代わりにシュエラ様を要求するってことは、シュエラ様は皇帝に嫁^{よめ}がなければ

ばならないってことじゃないですか！」

カチュアが責めるようにケヴィンに言葉を投げつける。それを聞いて、シュエラはようやく自分の身に降りかかった事態を理解し、そして愕然がくぜんとした。

「いや、皇帝はシュエラ様に夫とする相手を選えらぶ権利を与えた。その選択をするためにも早急にシュエラ様と会いたいと言い、期限を三週間後に切ってきた」

「三週間とはいつからですか？ 残りはいと何日ですか？」

「マントノン夫人！ 何でそんな冷静に質問できるんですか!? シュエラ様が遠い異国の地に連れ去られようとしてるんですよ!？」

「カチュア！ マントノン夫人だって動揺なさっているのよ！ 見てわからないの!？」

フィーナに怒鳴られてマントノンを改めて見たカチュアは、後悔したように青ざめる。

「あ——」

マントノンはお腹の前で両手をきつく握り合わせ、かすかに身を震わせながら言った。

「フィーナの言う通り、動揺してシュエラ様のお気持ちを考えない物言いをしてしまいました。ですが、ケヴィン様がこうして来られた以上、シュエラ様が国境に向かわれるのは決定事項です」

マントノンは、再びケヴィンの方を向いた。

「期日までにシュエラ様が到着していなければ、会談に差し障りがあるのではないですか?」

「ええ。皇帝がそれ以上は待てん」と言っていたことから察するに、期日——今から二週間後を過ぎれば和平自体が成立しない可能性があります。皇帝は、要求が通らないのなら戦争も辞さない

構えです。もちろん国王陛下も、何とかシュエラ様を渡さなくて済むよう、今この時も必死に策を練っておられることでしょう。ですがその策が成らなかつたためにも、期日には皇帝と面会できるようシュエラ様には早めに国境へ向かつていただきたいのです」

わたしが和平の証として帝国に赴おもむく——

二週間ほど前、シグルドを見送った時に感じた言い知れぬ不安は、これだったのだ。

隣国レシュテンウィッツの向こうに広大な領土を有するグラデンヴィッツ帝国。シュエラはそれ以上のことをほとんど知らない。

以前、寝しなにシグルドが語ってくれた話の端々はしはしに現れた帝国の影。軍勢力も強大で、帝国が軍を進めてきたというだけで、レシュテンウィッツの内戦に軍事介入していた国々は慌てて自国の軍を撤退させ始めたという。

そんな国が攻めてきたら、ここラウシュリッツ王国はかつて隣国に攻め入っていた時以上に疲弊する。それどころか、隣国のように国土を踏みじられ、人々は逃げ惑うことになるだろう。

祖国をそんな目には遭わせられない。けれど、それと引き換えに自分を要求されたことを考えると、気が遠くなりそうなほどの恐怖を覚える。

この国から一步も出たことのないシュエラにとって、見知らぬ国に人質として赴くなど、真つ暗で底の見えない暗闇に飛びこむようなものだ。

けれどそれ以上に、シグルド以外の男性のもとへ嫁よめがなくてはならないということが辛い。

王妃になっていいのかと散々思い悩んだのに、その迷いは完全に払拭された。しかもシグルドの

王妃になるといふ夢が断たれたことによつて。

皇帝の要求をくつがえすのは、容易なことではないはずだ。シュエラが人質になることを拒めば、帝国はこの国に攻め入りかねない。そうなれば、たとえこの国に留まれたとしても、シュエラが王妃になることは許されない。シュエラも自分自身を許すことができない。

今シュエラに求められているのは、この国のために自らを捧げる覚悟。

シュエラは瞼を伏せて深く息を吸い、それから顔を上げてまっすぐにケヴィンを見た。

「わかりました。今すぐ出発しましょう」

「シュエラ様！」

カチュアが悲鳴にも似た声を上げる。それを無視するかのよう^かにケヴィンは言った。

「馬車の手配はしてあります。シュエラ様は当座で必要なものだけご準備ください。旅に必要なものはわたしがご用意いたします。——持っていきたいと思われるものは、あとからお送りすることもできますから」

苦渋に満ちたこの言葉から、ケヴィンもまたシュエラの帝国行きを回避できる術はないと思つていることがうかがえる。

誰もが言葉を失っている中、シュエラは気丈に声をかけた。

「誰か、わたくしの荷物をまとめるのを手伝つてちょうだい。実家から持ってきた鞆^{かばん}に、身の回りのものを詰めてくれればいいわ。ケヴィン様、着替えないでいいのでしたら、荷物をまとめて次第すぐ出発できます」

その時、セシルが弾かれたように走り出した。

「わたくしも自分の荷物をまとめてまいります！」

「セシル！ あなたはどこへ行くと言うのですか！」

マントノンが鋭い声で呼び止める。立ち止まって振り向いたセシルは、迷いのない表情ではつきりと言つた。

「わたくしも、シュエラ様と帝国へ参ります」

それを聞いたカチュアも、開け放たれたままの扉へと駆け出す。

「あ——あたしも行く！」

「わ、わたくしも！」

カチュアにつられるようにして、他の三人も扉に向かおうとした。

しかしセシルは扉の前に立ちはだかつてそれを遮る^{さか}。

「あなたたちは駄目です！」

「何で!？」

「ちゃんと考えて。帝国へ行くことになったら、家族や大切な人たちと二度と会えなくなつてしまふのよ？」

カレン、マチルダ、フィーナの三人は、はっとしてその場で立ち止まる。

カチュアだけがセシルに食い下がった。

「シュエラ様だって同じでしょう！ セシル、あんなだつてそうよ！ 二人だけにそんな辛い思

いをさせられないわ！」

セシールは激昂するカチュアの言葉を黙って受け止め、それから静かに口を開いた。

「カチュア、あなたが帝国に行くことになったら、辛い思いをするのはあなただけじゃない。あなたのご家族も悲しい思いをすることになるの。ご自身が要求されているシュエラ様は必ず行かなければならないけれど、あなたが行く必要はないのよ？」

セシールの言う通りだった。行かなくてもいいのなら、行くべきではない。国同士の取り決めなのだから、シュエラの身の安全は守られるだろう。でも、ついていく者たちも守られるとは限らないのだ。

彼女たちの家族からすれば、そんな場所へなど娘を行かせたくないに決まっている。だから彼女たちには、安易な判断を下してほしくない。

その思いを代弁するかのようなセシールの言葉に、シュエラはひとまず黙って耳を傾けた。

「あなたのお父様は、きつとあなたが帝国に行くことをお許しにはならないわ。それともお父様の反対を押し切って、あなたを愛してくれるご家族を不幸にするの？ そんなことをして、後悔しないでいられる？」

「でも、それを言うならセシールだって……」

シュエラについていくことがどういうことか、カチュアもようやく理解できたようだった。それでも彼女は弱々しく最後の抵抗のための言葉を探している。

セシールはそんなカチュアにきつぱりと言った。

「わたくしの父は、わたくしがシュエラ様について帝国に行けば、こんな名誉なことはないと大喜びするわ。それにわたくしには、二度と会えなくなることを悲しんでくれる家族は一人もいない」

そう言い終えると、セシールは部屋を飛び出していく。

シュエラは一瞬、セシールの瞳に涙が光るのを見た。

“二度と会えなくなることを悲しんでくれる家族は一人もいない”——？

誰かに説明を求めようと振り向くと、マントノンがシュエラの視線に気付いて話し出した。

「セシールは、ブラウネット男爵がよその女性に産ませた子どもだそうです。男爵に娘がいなかったこととセシールの見目がよかったことから、実の母親から引き離され、行儀見習いとして上級貴族の邸やしきに使用人として出されたと聞いています。男爵より格が上の貴族に嫁よめがせたのでしよう。セシールは以前子爵家の長男と婚約していました。……ブラウネット男爵はどうやら欲深い人物のようで、セシールを自分の欲得を満たす道具としか思っておらず、セシールの実母は彼女が父親に連れていかれてから行方知れずだといっています。そのため、セシールには家族がいなくても同然なのです」

「あ——あたしセシールの荷づくりの手伝いをしてきます！」

マントノンの話を黙って聞いていたカチュアはそう叫び、部屋から飛び出していく。

残った三人に、マントノンは指示を出した。

「あなたがたはシュエラ様のお荷物を準備なさい」

「は、はい！」

彼女たちが早足でシュエラの荷物が置いてある寢室に向かうと、ケヴィンはシュエラに声をかけた。

「それではわたしは、玄関ホールでお待ちしております」

「ケヴィン様、最初から気になっていたのですけれど、お顔の色が悪いですわ。ずいぶん無理をして戻ってこられたのではありませんか？」

「わたしが一日でも早く到着すれば、それだけシュエラ様の旅程に余裕ができると思います」

「ケヴィン様も国境に向かわなければならぬと思いますが、少し休んでから出発なさってください。ケヴィン様は馬に乗れますけれど、わたくしは馬車で移動するしかありませんもの。一日二日わたくしより遅れて出発なさっても、すぐに追いつけるではありませんか？」

シュエラが気遣うと、ケヴィンは申し訳なさそうに目を伏せた。

「……単に寝不足なのですが、お心遣いありがとうございます。そのようにさせていただきます。ロアルを同行させますので、国境へ向かう間は、ロアルに何でもお申しつけください。——王城を出るところまでは、お供させていただきます」

「ありがとうございます」

ケヴィンが出ていくと、マントノンが遠慮がちに近寄ってきた。

「あの、セシールのことなのですが……」

その言い淀んだ様子から言葉の先を察し、シュエラから口にする。

「セシールに家族はいないかもしれないけれど、セシールがいなくなれば悲しい思いをする人もい

るでしょう。故国に二度と戻れなければセシール自身も辛いと思うわ。だから帝国へは……」

「シュエラ様ならそうおっしゃると思います。ですからお願いしたいのです。どうか、セシールを連れていってください。あの子は、シュエラ様に一生お仕えする覚悟でいます。シュエラ様をお一人で行かせてしまったとなったら、おそらく一生自分を責め続けます。——本当はわたくしもお供すべきなのでしょうが……」

「わかっているわ。これまでだって無理を言っただ女官を続けてもらっていたんですもの。年若くして爵位を継いだご子息を助け、亡くなられたご夫君の代わりにマントノン伯爵家を守る使命があなたにはある。だから、もう十分です。今までありがとうございます」

マントノンは涙ぐんでうつむく。

「申し訳ありません。このような肝心な時に、何のお力にもなれなくて……」

「本当に気にしないで。それよりここに残るみんなのことを、どうかよろしくね」

「はい……かしこまりました」

深々と頭を下げるマントノンの肩に手をかけながらシュエラは思う。

国境に着く前に手紙を書く時間があるといいのだけれど……

シュエラの家族は、彼女が帝国に行くこと聞いたら悲しむだろう。でも理解してくれるに違いない。どんなに貧乏暮らしをしても、貴族の誇りまでは失っていないから。

この先一生会えなくなるなら、実家からシグルドとともに出発した時、あんな慌ただしい別れ方をするのではなかったと、シュエラは心の中でつぶやいた。

荷物の準備ができたので、シュエラは部屋を出て玄関に向かう。

玄関ホールではセシルが既に荷物を持って待っており、ケヴィンやカチュアと何やら話していた。

階段を降りてくるシュエラに気付くと、セシルは少し慌てたように話をやめ、お辞儀をする。

シュエラは途中で足を止め、あえて厳しい口調で言った。

「急ぎの旅ですから、道中は過酷なものになります。また、一度帝国に行ってしまったら、二度と戻ってくることはできないでしょう。それでもついてくるのですか、セシル？」

セシルは顔を上げて、決意のこもった目でシュエラを見つめた。

「承知いたしております。ですから、どうかお供させてください。シュエラ様のご温情を受けたあの日から、いつまでもお仕えすると心に決めていたのです」

「——わかりました。では同行をお願いします」

「はいっ！」

階段を降り、外に続く扉へ向かってまっすぐ歩いていくと、その後ろにセシルとケヴィン、セシルの鞆を持ったカチュアに、シュエラの鞆を持ったカレンとマチルダ、フィーナにマントノンが続く。

待機していた二人の侍従は、シュエラが近付いても扉を開けるのをためらっていた。重厚な造りの扉の向こうからは、大勢の人間のざわめきが聞こえてくる。ここからシュエラが姿を現したら、

どんな騒ぎになることか。しかし、出ていかないわけにはいかない。

ケヴィンがシュエラの前に進み出て言った。

「扉を開けなさい」

指示された侍従たちは、ためらいながらも二枚の大きな扉を開いていく。

すると、外のざわめきはびたつと止まった。

嵐の前の静けさのごとき空気を感じ、シュエラの緊張は高まる。

ケヴィンに続いて外に出ると、近衛隊士たちに阻まれながらも遠巻きに入り口を囲んでいた人々の視線が、一斉にシュエラへと向けられた。上等な衣裳を着た男性たちと、その後ろに少し離れて、侍従や侍女などのお仕着せを着た人々の姿。彼らの食い入るような視線に、シュエラは怯んでしまっている。

「通してください！」

ケヴィンがよく通る声で叫んでも、彼らは道を開けようとしなない。

両手を広げて人々を押しとどめる近衛隊士たちの肩越しに、あちこちから質問が飛んできた。

「愛妾殿をグラデン皇帝が要求しているというのは本当か!？」

「皇孫と交換だそうだが、帝国皇女と一介の愛妾とでは釣り合いが取れないのではないか!？」

そうだそうだという声、いたるところから上がる。

シュエラを庇うように、ケヴィンが前に進み出て答えた。

「グラデン皇帝レナードは、国王陛下のご寵愛ぶりから、シュエラ様に人質としての価値を見出し

ました。帝国の狙いは、我が国を意のままに操ることです。シュエラ様を人質に取られ、皇帝の血縁者を王妃として送り込まれては、我が国は帝国の支配下に置かれかねません。それを食い止めるため、国王陛下は国境にて尽力されておいでです。万が一、帝国皇女を王妃に迎えざるを得なくなつた時のために、あなたがたには議会で打開策を検討していただきたく」

ケヴィンの話を遮るようにして、再び彼らは騒ぎ出した。

「そんな交換条件は信じられん！ おまえたちがまた何か企んでいるのだろう！」

「そもそも陛下が愛妾を寵愛していることを、皇帝が何故知っている!?」

「レシュテンとの国境が閉ざされている今、グラデンがそのことを知っているのはおかしいだろう！」

「そうだそうだ！ 山脈を大きく迂回するもう一つのルートを使ったとしても、そのような最近の情報が届いているなどとはとても思えん！」

疑いの声とは別に、邪推の声も上がる。

「愛妾を連れ出し、どこぞで国王陛下と密会させる気ではあるまいな!?」

「陛下が国境にいらつしやるといふ話も疑わしい！ 密会の結果、男児が生まれたとて、我々はその子どもを王子とは認めないからな！」

耳をふさぎたくなるような非難の声。

シグルドはシュエラの目の前で、確かに国境に向けて旅立った。国に危機が訪れていると嘘をつけば人々を無用に混乱させるだけだというのに、どうしてケヴィンの言葉を信じられないのか。

彼らの非難はシグルドを侮辱するだけでなく、シュエラをも辱める。王妃になりたいがために、子を孕もうとしていると言われたシュエラは、羞恥のあまり今出てきた扉の中に逃げ帰りたくなる。その時、カチュアが前に出てきて叫んだ。

「そんなに信じられないなら、自分の目で確かめに行けばいいじゃない！」

皆が息を呑み、一瞬辺りが静まり返る。

カチュアは一介の侍女で、この場にはケヴィンでも敬意を払わなければならないほど身分の高い貴族たちもいる。

「カチュア、駄目！」

フィーナがすぐに我に返ってカチュアの腕を強く引っ張る。が、カチュアを止めることはできない。「戦争が起るか起らないかの一大事だつてのに、あんたたちときたら文句を言うばかりで、この一大事を何とかしようって考えもしないの!? あんたたちよりずっと若いシュエラ様が、我が身を犠牲にしてこの国を守ろうとしてるつてのに、ちよつとは見習いなさいよ！」

「カチュア！ お願いやめて！」

ケヴィン、マントノン、セシルや他の侍女たちも我に返って止めようとする中、シュエラも必死に叫ぶ。侍女が貴族にそんな口をきくことは許されない。ましてやカチュアは平民出身、処罰は貴族出身の侍女より厳しいものになる。

「侍女ふぜいが無礼な口をききおつて！」

近衛隊士ちかへだいたしを押しつけて近くまでやってきた貴族が、カチュアに向かって手を振り上げた。

シュエラはとっさにカチュアを庇かばって抱きしめる。けれど、貴族の手が振り降ろされる気配はない。その時、クリフォード公爵の低く押し殺した声が聞こえた。

「誇り高き貴族が、侍女ふぜいにカツとなつて手を上げるなど、見苦しいぞ」

そして今度は、間近にいる数人にしか聞こえないような小さな声で言う。

「マントノン夫人、この侍女を連れて中へ」

「は、はい」

マントノン夫人に引きずられるように館の中へ連れていかれそうになって、カチュアは抵抗しながら声を上げる。

「何ですか!? あたしは間違つたことなんか」

「カチュア、黙りなさい！」

マントノンに小さくも厳しい声色で言われ、カチュアはびくつと身をすくませた。

シュエラは、悔しそうに唇を噛むカチュアの顔を覗きこんでささやく。

「カチュア、庇かばってくれてありがとう。でも、そのせいであなたが罰せられたら、わたくしは悔やんでも悔やみきれないわ」

「でも、こんなあんまりです……!!」

くしゃつと顔を歪めて泣き出したカチュアを置いていきたくはなかった。けれど国境に向かう間、

何がきっかけで遅れが出るかわからないから、一刻も早く出発しなくてはならない。シュエラはカチュアの体を軽く抱きしめたあと、静かに言った。

「クリフォード公爵」

「処罰されることがないよう、手を回しましょう」

「ありがとうございます。——それじゃあ、カチュア、マントノン夫人」

「シュエラ様、どうかお元気で」

「シュエラ様——お、お元気で」

カチュアも涙声になりながら、何とか別れの言葉を口にする。彼女の持っていたセシルの鞆かばんをフィーナが預かり、カチュアとマントノンは北館の中へ戻っていく。

それを見送るシュエラの背後で、ブレイス侯爵が人々に向かって話をしていた。

「愛妾殿あしよの引き渡し期限まで、あと二週間しかない。それを過ぎれば開戦すると、皇帝がほめかしているそうだ。期限に遅れて戦争が始まってしまつては元も子もない。この国の安寧あんねいを考えれば、道を開き、愛妾殿を通すのが道理と理解できるはずだ」

ブレイス侯爵が説得して道を開けている間に、クリフォード公爵がシュエラに話しかける。

「シュエラ様、馬車は西門から正面へ移動させました。国のためにその身を捧げてくださるあなたを、通用門からこっそりお送りするなどという失礼はできませんので」

随分大仰に言われたような気がして、シュエラは恐縮して視線を下げてしまう。

「わたくしも貴族ですから、国のために身を捧げるのは当然です」